私の弟は神様！？

人間

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の弟は神様！？

【Ｎコード】
Ｎ２０８３ＢＤ

【作者名】
人間

【あらすじ】
　入学式から神様が来るまでの日常の様子とキャラクターたちの説明の話

神様が家に来た日（前書き）

下手くそですので気楽に読んでください

神様が家に来た日

本日４月６日は私の誕生日だ。
そう、この日私は、神様の姉になってしまった…

約三時間前

「はぁ…高校生か…不安だなぁ…」
現在４月６日９時３０分頃私こと霞雫（かすみしずく）は高校生になった。
というより、その入学式まったただかである
「なんでめでたい日にため息ついてるの？」
隣に座り私に尋ねてくる相手は私の幼馴染の楠美樹（くすのきみき）スポーツ万能頭も良く、人柄も良いある意味万能超人。但しおちょっこちょいというか…マイペースというか…そんな子だけあって入学式という大人の階段へまた一歩上るというこの儀式のようなことには五月蝿（うるさ）いのだ。
「だって…友達できるか不安で…そりゃ美樹はなんでも出来るから良いけど私は…」
私は美樹に顔を背け少しヒネくれた口調で告げてしまう。
「私だってなんでもは、出来ないよ？自分が出来ることを一生懸命やってるだけだから…」
私のそんな口調に少しショックを受けてしまったようだったが、それでも少し引っかかった。
「美樹にも苦手なことがあるの？」
何でもは出来ないという美樹だが、私は長年一緒にいるが何ができないのか知らなかった。
「料理が…ちょっとね」
少しハミ噛みながら答えた。そういえば相手の料理をするところをあんまり見たことがなかったな…

「料理が苦手なの？手先も器用なのに？」
意外なことだったので少し大きく声を上げてしまった。手先が器用なこ
「え～今までの会話で私個人が料理が苦手なこと、手先が器用なことについて話をしましたか？」
体育館の前ステージ上で若干怒り気味に話しかけてきた。私は思わず
「た、多分…」
っと少し下を向きながら答えてしまった。後々クラスメイトになった子によると、校長先生の話はこの学校の説明と今後についての話だったらしく…入学初日から赤恥をかいてしまった…

そんな入学式を終えてからすぐに昇降口の方に貼り出されているクラス分けを見て自分のクラスに向かった。
「あ。」
「あ。」
クラスに入るといきなり見知った顔がある。中学から同じ学校の四星寺虎彦（しせいじとらひこ）通称タイガー。なんでも、タイガーの家は代々四方の守護獣である青龍、白虎、朱雀、玄武だっけ？の名前を少し受け継いぐらしい。本人は虎なんて名前が入ってるのは嫌だって言ってたけど…
「なんで、タイガーここにいるの？」
「タイガーって言うな！名簿をよく見ろよ…俺とお前後、楠も同じクラスだぞ…残念ながら龍は別クラスだけどな…」
龍とはタイガーの双子の弟の四星寺龍輝（しせいじりゅうき）君と言ってもほとんど似てない（…タイガーは強情で五月蝿いくだけど、何気に情にあつい熱血タイプだけど龍君は健気で優しくなんか、守ってあげたいタイプ！タイガーと龍君とは中学校の時に知り合って結構一緒に遊んだりしてた。
「そっか…龍君だけ違うクラスか…タイガーは別でよかったのに…」
「はぁ…お前じゃなくて龍輝と一緒のほうがよかったな」
っと少しハモりながら言ってしまい睨み合い開始すると同時に
「良かった…虎君と、雫と同じクラスなんだよね？」

と少し遅れ気味にクラスに入ってきた美樹にタイガーが
「あ、ああ…龍輝だけ違うけどな…」
と何故だかかしこまりながら答えた。う～ん？
何故かタイガーは美樹にだけ態度が違うそのことに対して、一度タイガーに聞いたところ
「べ、別にいいだろ！お前には関係ねえ！」
とキレられたのでそれ以上聞くことをやめた。
「でも、三人も同じクラスでよかったねよね！だってこの学校９クラスもあるんでしょ？よく一緒になれたよね…」っと美樹が言ったのでそういえば不思議だなっと考えていると

キーンコーンカーンコーン
っと予鈴がなったのでとりあえず、自分の出席番号の席に座り先生を待った。

「っとこれで私の話は終わるが何か質問はあるか？…よし、無いなそれじゃぁ、今日はもう下校してくれ」
このクラスの担任の先生らしい名前は確か阿澄（あすみ）先生がそう言って教室を出ていった。
「あの先生話長い…座り疲れた…」
うーんっと椅子に座ったまま背伸びをして机に寝るそこに、美樹が近づいてきた。
「あの人が私たちの担任だって…これから一年色んな意味で大変そうだね…」
私がちょっと顔を上げて
「これから一年あんな話の長い人に教わらなくちゃいけないのか…」
そうつぶやいてから思わず、二人で小さくため息をついてしまった。
それを見て二人ともクスっっと少し笑い美紀が
「そりゃじゃぁ、帰ろう♪」
「うん！」

そう言って二人して教室から出ていった。

昇降口を出ると
「おおーい…美樹さんー雫さんー」
っと後ろから声がしたので振り返ってみると龍君がいた。
「クラス…違ったね…」
会ってすぐに、私が少し暗めの口調でそう言ってしまったので空気が一瞬暗くなるが龍君が
「え、ええまぁ、そうなんですけど…そこ覚悟してましたから！」
苦笑気味に答える相手にあんまり触れないほうがいいなぁっというよりも、私なんてこと言い出してたんだろ…っと少し落ち込んでしまう…
「え！？な、なんで落ち込んでるんですか！？」
っと龍君が心配してくれる。ああ～タイガーにもこのぐらい優しさがあれば…とそこで美樹が
「あ、気にしないで！自虐気味になってるだけだから」
っと少し酷いと思う発言をされたが気にせず立て直し
「それで、何かようだった？」
相手に呼ばれたのだから何か用があるのだろうと思い相手に尋ねるが
「いいえ？何も」
「ないの！？じゃぁ、なんで…」
正直不抜けてしまったのだが、なんだか、美樹の方はクスクス笑っているむ～
「二人を見つけたので声をかけただけです！」
「そ、そうなんだ…」
意外な理由だったので戸惑ってしまうが、美樹が
「そうだったんだ？じゃぁ、一緒に帰る？」
「え！？、あ、いいえ！結構です！虎兄と一緒に帰りますので！」
「そう？じゃぁ、また明日ね虎君！」
「え！？なんか、話終わってる！？あ、じゃぁね虎君」

っと少しぼーと二人の話を聞いていたら美樹が虎君に挨拶をしてさっさと行ってしまったので少し遅れ気味に虎君に挨拶するとすぐに美樹を追いかけると後ろで虎君が
「はい！また明日です！」
と手を振って返してくれるああ～虎君可愛いな…
「なんか、邪悪なこと考えてない？」
少し呆れ顔で美樹が聞いてくる。ん？邪悪なことなんて考えてないけどなんだろう…
「何が？」
「いいや、なんでもない…さっさと帰ろう！」
「うん？うん」
という訳で、二人でさっさと自分の家に帰ってしまった。帰る途中今後の不安とか二人で話してたけど…まぁ、ここに書く事じゃないからいっか。

「ただまぁ！」
「おかえり～」
この返事を返してくれたのは私のお父さん霞祐一（かすみゆういち）仕事はなんか大きい会社の幹部なんだって、ほぼ一日中家にいるんだけどなぁ…でもそのくせ給料も結構高いし…う～ん謎…
「なんかお前宛に荷物が来てるよ？ほい」
っと帰ってきた娘に急に物を投げる父。
「っちょ、っとと…急にもの投げないでよ！」
「ごめんごめん～」
なんというか、軽い父である…はぁっと少しため息をつきながら荷物を見ると
「宛先人がお母さん？」
私の母霞涼子（かすみりょうこ）は私が赤ん坊の頃に亡くなったらしい、物心着く頃には私のお母さんは…
「あれ？荷物より先に佳奈お姉ちゃんは？」

霞佳奈父の再婚相手で私の義母である。母とは幼馴染で二人とも父が好きだったらしいけど父が母を取って身を引いたらしいそれで、母が死んでから慰めてるうちにゴールインしたらしい…ちなみに何故佳奈お姉ちゃんと呼んでいるかというと母や父とは同じ年齢に見えないぐらい若い、その上豪快な人だから、ついお母さんと呼ぶよりもお姉ちゃんと呼んだほうがしっくりくるのだ。
「ん？佳奈か？かなら買い物に出かけているぞ？」
「そうなんだ…で…なんで、お母さんから荷物？」
「さぁ？誰かのいたずらか？」
再び荷物に目線を落とすと父も荷物を見て
真剣そうに箱を見たがわからなかったのでとりあえず開けてみることにした。
「それじゃぁ、開けるよ？」
「よし来い」
何故かミッドを構えてこっちを見ている父だがとりあえずスルーして箱を開け始めた。
「最近娘が構ってくれない…」
父が遠くを見ながらつぶやいていたが無視をしていたら箱が開いた
「あ、開いた。中に入ってたのは…？カード？」
中に入っていたのは妙に電子機器っぽいカードが一枚と、取扱説明書みたいな薄い紙が一枚入っていただけだった。
「え～となになに？」
父が勝手に取扱説明書を見ていた
「まず、カードを左手に持って前に差出ください」
「え！？やるの？」
急に動作を要求してきた父に思わず一歩引きながら聞いてしまう。
「やらないとどうなるかわからないじゃないか？」
はぁ…っと小さくため息をつくと言われたとおりの動作を行う
「そして、腕を少し斜めに曲げて上に上げてください。そのあとに右腕を前に真っ直ぐ出したあとに曲げてそのまま下ろしてください。

そして右足を内側で曲げて」
言われるがまま動作を行うと
「シェー！」
思わず近くにあったクッションを父に投げてしまった
「ちゃんとしたの言ってくれないと今度から一切口聞かないよ！」
今の格好は流石に恥ずかしかったっと思い顔を赤くしながら言うと
父が
「それだけはやめて～娘と戯れたいの～」
と泣きついてきたので許すことにした
「じゃぁ、ちゃんとしたの教えて」
「はいはい、え～とカードを口元に近づけて」
「最初から違ったの！？」
最初から父はふざけていたらしい…
「うん、まぁね…で、え～とそのまま何か願ってだって」
「そんな簡単なことで良かったんじゃん…」
まだ少し赤い顔のまま少し叶わなそうな母に会いたいという願いを
込める
「…終わった？」
「うん」
その瞬間カードが光思わず投げてしまう
「投げる？普通」
「さっきお父さんだって投げたじゃん！」
父がスルーしたのでそのままカードを見てるとさらに光が強くなり
「眩し！」×2
親子ハモって言うと光が収まり、気がつくとカードのところに人影が
「あなた誰？」
光が完全に収まると自分よりもちょっと小さめの男の子がいた
「初めまして僕は要統（かなめみつる）神様やっています！」
そう、この瞬間私は神様と知り合いになってしまったのです…

神様が家に来た日（後書き）

最後まで…読んでくれていたら嬉しいです…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2083bd/

私の弟は神様!?

2015年6月12日20時08分発行